



スターマン・ジョーンズ
/ *Starman Jones*
(1953) / ロバート・A・
ハインライン(矢野徹訳)
/ 早川書房(文庫・12/15
刊・¥420)

ハインラインが、六〇年代はじめまでに発表した単行本のうち、約半分はジュヴナイルに分類される作品だった。『宇宙船ガリレオ』や『赤い星の少年』等、かつての小説に思いつきを抱かれている方も、多いことだろう。

マックスは田舎に働く農夫である。しかし、義母との不仲から家を出、宇宙港へ行く。そこで知り合ったサムの手引きで、宇宙船「アスガルド」乗船に成功するのだ……。

(特にジュヴナイルでは)ハインラインの主人公は、物語を通じて、決して「信念」を変えることがない。少年たちの成長が、主な題材とっていいだろう。そこで、挫折や屈辱は、確かに描かれているのだが、主人公の意志が崩れさりはしない。現実には、ありそうにない展開である。けれども、幼いころ心に定めた「夢」を、ついに手にする主人公の姿は、読者の共感を誘うものだった。降りかかる災厄は、意志を強固にする試練であり、決して乗り越えられない敵ではなかったのだ。

この六年後、同じジュヴナイルである『宇宙の戦士』が、その主題の露骨さゆえに、大変な話題を呼んだことは、「信念」の生み出した象徴的事件といえるだろう。